継承され磨かれる うきはを一望する天空の茶園。

特集 有機新茶

樋口勇八郎

文：梶原圭三

写真：井上竜一

そこは、まさに「天空の茶園」であった。

耳納連山奥深い福岡県うきは市鹿狩（かがり）地区。地名から察するに以前は鹿の狩場になっていたのか、人家もまばらな標高 400 メートルの深い山あいに突如としてそれは現れた。元々棚田であったところを少しずつ茶園に変えていった為、茶園の多くが急勾配の段々畑。その山の斜面を覆う新茶の緑の帯は、規則正しい曲線を描きながら天空に向かってどこまでも伸びているようだった。

4 月 28 日 快晴 気温 24 度

山々の新緑が眩しいこの季節、我々編集チームは、新茶の茶摘みが始まった頃合いを見計らい、「うきはの山茶」でオリジナルブランドを展開する株式会社新川製茶の茶園を訪れた。茶園は鹿狩の山中に点在し、その数は数十カ所を数える。その総面積はなんと 7 町（約 7 ヘクタール）にも及ぶ。1 日で回るのは到底不可能。その一つに案内してもらった。案内をしてくれたのは新川製茶二代目の樋口八郎さん（77 歳）。45 年前にこの地でお茶の無農薬有機栽培を始めた人であり、今回の主人公、三代目の樋口勇八郎さん（48 歳）のお父さんである。

「今朝、雉（キジ）に遭うたけん、今日は縁起の良かたい！あんたたちゃツイとるね！」と、人懐っこい笑顔で我々を茶園まで先導してくれた。

茶園に着くと、勇八郎さんを含め 3 名で茶摘みの真っ最中。今年初めて出てきた初々しい新芽を手際よく摘み取っていた。機械の無い時代は新芽として伸びた茶葉の「一芯二葉」を手で摘み取っていたという。気の遠くなる話である。今では大きなバリカンのような機械で摘み取っているが、この茶葉を摘み取る際の長さの調整は長年の経験と勘によるものだそうだ。

こうして摘み取られた茶葉は、同じく鹿狩の山中にある製茶工場内で荒茶製造、再製仕上げ、充填、出荷という工程を踏む。一般的に製茶業界ではこの工程は分業にて行われていることが多く、新川製茶のように販売も含め一貫して自社で行っているケースは極めて珍しい。それは、こだわって作ったものをお客様に直接お届けしたいという強い想いの現れである。

しかし、ここに至る 45 年の道のりは決して平坦ではなかった。

棚田から茶園へ

戦後、勇八郎さんの祖父岩雄さんはこの地でコメ作りと林業で生計を立てていた。この地では、お茶は古くから各家庭で自家飲みとして栽培はされていたものの、庭の軒先に生垣代わりに植えられている程度。当時は食糧難の時代でもあり生計の主力はコメ作りと林業であった。現在、全国棚田百選にも選ばれた「つづら棚田」が有名なように、当時この地は数多くの棚田が山々の斜面を彩っていた。

昭和 34 年、高校を卒業した八郎さんは家業を継ぐべく就農。その 4 年前に、この地区で摘み取ったお茶を共同で製茶にする工場が立ち上げられた。「新川製茶協同工場」である。しかし残念ながら 2 年後には採算が合わず解散。その工場を樋口家で買い取ることになった。これを機に八郎さんは、栽培の主力をコメからお茶に転換していく。この時、製茶技術の無かった若い八郎さんに製茶技術を指導したのが、八女でお茶の技術指導員をしていた溝口育平さんである。この溝口さんとの出会いによって八郎さんの製茶技術が磨かれていき、茶園の拡大につながっていった。棚田が少しずつ茶園に姿を変えていった。

二代目の決心

昭和 48 年。時は高度経済成長の恩恵を受け拡大と効率が求められる時代。農業においてもその波は押し寄せていた。順調に茶園を拡大していた八郎さんは、より生産性を高めるため農薬も化学肥料も使用する慣行栽培でお茶を栽培していた。栽培面積の増加に伴い農薬の使用量も増えていたものの、なんの疑いもなく農薬散布を続けていた。ところが、ある時期から頻繁に体調を崩すようになり、ある日ついに立ち上がれなくなってしまった。明らかに散布した農薬を自らが吸い込んでいる事によるものであった。「このままでは体がもたん」と悟った八郎さんは、無農薬でお茶を栽培する決心をした。

私は一言で無農薬に切り替えると書いているが、その決心は相当なものだったと感じている。今でもお茶の無農薬栽培は極めて難しい。当時は尚更である。

しかし、勇八郎さんを含め 3 人の幼い子を育てていた八郎さんは、まず最初に家族の事を思ったに違いない。家族の為に無農薬栽培に切り替える。その決心があったからこそ、この先幾度となく待ち受ける困難にも心折れずに立ち向かっていけたのだと思えた。事実、無農薬に切り替えた当初、茶葉は虫に食われ、病気も出た。できたお茶は赤褐色で買い手はほとんどつかなかった。その間、林業でなんとか食いつなぎながら、それでも八郎さんは決心を曲げなかった。

その苦労の甲斐あって、数年後、ある新潟のお茶問屋から大量購入の依頼があり、そのお茶は「ゆうき樋口作り」という商品名で販売された。八郎さんの腕が認められ自らの名前が冠された最初の商品であった。

そして 2001 年、勇八郎さんの代になり有機 JAS の認証を取得し、現在でも継続して認証を受けている。

三代目の決心

八郎さんが無農薬栽培に切り替えた年の 4 年前の昭和 44 年、勇八郎さんは樋口家の長男として生を受けた。「お茶を栽培する上で必要な足腰と体力、精神力は子供の時に鍛えられましたね」。と勇八郎さんは当時を振り返る。深い山あいのこの地では、福岡とは言え冬場になると雪も積もるし、零下にもなる。そんな環境の中でも半袖半ズボンで保育園まで 2 キロの山道を歩いて通う毎日。小学校はさらに遠く、4 キロの山道を歩いて通い続けた。加えて小中高と剣道で心身を鍛えた事が今に活きているという。

一方で、少年時代の勇八郎さんは、お父さんの八郎さんが無農薬栽培に切り替えて苦労していた事を知る由もない。我が家はお茶農家程度の認識だったそうだ。「長男なので、家を継ぐんだろうなーという漠然とした意識はありました。ただ、大学に行き見聞を広めたら、自分に合った他の仕事が見つかるかもしれないとも思っていました」と当時は迷っていた事を打ち明けてくれた。

そんな勇八郎さんに大きな転機が訪れる。大学進学が決まっていた高校 3 年 12 月の深夜の事である。

その日は特に寒さが厳しかった。お母さんが丸ストーブで暖をとりながら椎茸を乾燥していた時である。ちょっと目を離した隙にその火が引火した。みるみるうちに火の手が広がり、家は全焼してしまったのである。当時築 100 年以上経っていた茅葺き屋根の母屋はあっという間に燃えてしまった。幸い家族は全員無事ではあったものの、家財道具はもちろん、教科書や制服、思い出の写真など全てを焼失してしまった。

翌日、勇八郎さんは、両親とともにご先祖のお墓を訪れた。そこで涙ながらに墓前で詫びる両親の背中を見て、「これから再建していく中で、自分が継ぐ事が唯一の希望の光なんだ」と確信したという。そして、お世話になった地元集落の人たちの前で挨拶した際、はっきりとそして力強く「大学卒業したら戻ってきて後を継ぎます」と宣言した。

周りは大きな拍手に包まれた。

Farmer's inside stories and growing techniques of organic tea